

オーバーロード 一足早い最強御方異世界転生

シオンカシン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DMMPGGユグドラシル

そのユグドラシル最強と呼ばれたプレイヤー

『フィロ』

彼はリアルで主人を守る為、銃弾を受け死亡した
しかしそんな彼に異世界転生話が舞い降りる。

「ではユグドラシルのキャラで転生を」

転生先はプレイヤーが転移していた世界だった。
注意！

この小説は作者がいろんなものを混ぜ込んだ
オーバーロードが一応原作のパロディ小説です。
独自設定解釈、オリキャラ、原作大改変など
やりたい放題してます。

通りすがりの仮面ライダーのシステムや
ダンボールの中で戦わないロボットホビーなど
多くのキャラにはなんらかの元ネタが有り、
逆に作者オリキャラの方が珍しいほどもです。
そのためオーバーロードとは

一切関係無いキャラも沢山出るし、
分かる人には分かるキャラも大勢出てきますが
オーバーロードのキャラもちゃんと出ます。

(設定を変えて無いとは言っていない)

そんな小説でもいいなら楽しんでください
(なお事あるごとの微調整は見逃してください)

目次

本編 序章

第1話	竜王ツアーとの会話	1
第2話	異世界転移	3
第3話	未知との遭遇 そして正義降臨【前編】	7
第4話	未知との遭遇そして正義降臨【後編】	11
第5話	戦士長の強さに、ニグン死す	19
王国編		
第6話	冒険者【前編】	23
第7話	冒険者【後編】	27
第8話	王国守護者 黒	33
第9話	漆黒の一撃	40

本編 序章

第1話 竜王ツアーとの会話

「アーグランド評議国」

それは多数の竜王の議会制で運営されている国。

その竜王達の一体

ツアーこと、『ツアインドルクスⅡヴァイシオン』

かつて現れたという八欲王のギルド武器を保護するために、その場から動かない彼の元にある一人の青年が訪れていた。

250年来の友人であるその青年との会話は、ツアーにとってはかけがえのない時間だった。

「それで？100年の揺り返しは今年か来年かな？どう思うツアー？」

青年との話題は「100年の揺り返し」と呼ばれている出来事の中で、ぶれいやーとも神人とも呼ばれ、100年の周期でやって来る者たちが、いつまたやって来るかだった。

ツアー「多分今年だと思うね。前回の神人大戦からちょうど100年じゃないか。どの国に来るかもわからないのだから来年だとしても備えはしておいた方が良くに決まっているしね」

ツアーは100年前にやって来たぶれいやーと、現地勢力との戦い「神人大戦」を思い出す。

青年「やはりか、今回はまともな奴が来ると良いのだが。200年前の十三英雄みたいな、冒険がしたくて、世界にあんまり影響を出さなくて、そこそこに弱くて、この世界に理解ある奴がいいな。前回の中途半端に力を持った馬鹿共や、八欲王みたいな連中は願い下げだ」
青年もツアーも「十三英雄」と呼ばれる英雄達の仲間であり、神人大戦でも共に戦った、いわば戦友であった。

ツアー「世界最強が何を言ってるんだい？あのぶれいやー達が恐れられている『孤高の龍帝』とも思えない台詞だね」

かく言うツアーも、自身に縛りをかけなければ世界最強、と謳われていた。それは、今は亡き十三英雄達も、いま目の前にいる青年も、認めていた事だった。

青年「いつの話をしている？今の俺じゃ前回の馬鹿共ならまだしも、上位陣の連中が沢山来たら太刀打ち出来んぞ。言っただろう、馬鹿共のせいで本気が出せなくなったんだ」

前回の神人大戦の影響で、青年は全力全開の戦闘が出来ない状態になった。確かにワールドチャンピオンや、ワールドデザイナーといった連中がやって来たら、確かに面倒事だったのだが…

ツアー「だとしても最強に変わりはないよ。それに君が本気を出したら世界崩壊待った無しじゃないか。それに守護者達もいるんだし」
それなりの対策はしているらしい。

青年「まあね。早く来てくれないかな、あの人達」

青年は、かつて所属していた組織の、頼れる仲間達を思い出す。

ツアー「君がそんなに言うからには凄い人達なんだろうね？なんて名前だったかな？」

青年「名前忘れんなよ？俺が死んだらお前さんに託すんだからな？その人達の名前というか組織名は…

「アインズ・ウール・ゴウン」

だぞ」

青年の名前は『フィロ』

大人気DMMORPG

「ユグドラシル」 十大ギルドの一つ

「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバーであり

「孤高の龍帝」と謳われた

ユグドラシル最強クラスのプレイヤーである。

これは一足早く異世界転生した至高の御方が、その知識、技術、力で、ある国を守りながら、仲間達を待っていた物語である。

第2話 異世界転移

大人気だったDMMORPGユグドラシル

12年間愛されてきたゲームも、サービス最終日が近づいてきた。

「やっとか」という意見もあれば、「終わらないでくれ!」という意見もある。「まだ遊び足りない!」という意見もあれば、「もう潮時だな」という意見もあるだろう。

ここは「ナザリック地下大墳墓」

ユグドラシル十大ギルドの一つ

ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」

ユグドラシルで有名なDQNギルドの本拠地である。

難攻不落で知られるナザリック「第9階層ロイヤルスイート」その円卓に居るこの見た目が恐ろしい骸骨魔王は、「終わらないでくれ!」と切に願っているプレイヤーの一人だろう。

骸骨魔王の名前は『モモンガ』

ナザリック地下大墳墓 至高の41人のまとめ役

つまりギルド長である。

晴れてナザリックの仲間入りを果たす為には、加入条件を満たさなければならぬ。その条件とは、

「異業種である事」

「社会人である事」

つまり全員生活が掛かっているのだ。

彼は、長年愛したユグドラシルが終わる前に、家庭の為だったり、夢を叶える為だったり、逆に叶えた為に、足が遠のいていたギルドメンバー達に対して、こんなメッセージを送った。

「最終日にもう一度集まって、ユグドラシル最後の時を一緒に迎えますか?円卓で待っています」と

そして彼はメッセージの最後に、ダシに使うことを許してくださいと思いつつ、この一文を加えた。

「最終日はフィロさん命日ですしね」

そしてナザリックは、運命のユグドラシル最終日を迎えた。

最終日、モモンガは円卓ついて、ユグドラシルの思い出に浸っていた。

ナザリックを初見で落とした事、ボス相手に一喜一憂した事、素材集めで何を優先するかメンバー同士で口論した事、1500人ものプレイヤーとのナザリック攻防戦など、名場面を撮った写真、映像のスクロールは数え切れない。

そしてメッセージを見てやって来てくれたギルドメンバー達。メンバー同士の漫才とも言えるいつものやり取りは、最盛期のナザリックをモモンガに思い出してくれた。

「ウルベルトさん、何度言わせるんですか。悪が栄えた試しが無いように、悪による征服なんて出来ないんですよ」

「わかってないですねたちさん、それを実行する事にロマンがあるんじゃないですか。それが分からないとは、あなたは本当につまらない人ですね」

「まあまあ、たちさんもウルベルトさんもその辺で。モモンガさん、あそこに行くんですけどそろそろ時間ですよ」

「ありがとうございます、タブラさん。皆さんちよつといいですか？」
自分達が居ない間も、ナザリックを守ってきたギルマス、モモンガの一言に、癖のあるメンバー達もじつと静かに見守る。

「今日は私の呼び掛けに応じてくださって、ありがとうございます！
サービス終了時刻まで、あと一時間半ぐらいになったので、皆さんで「刃の間」に行きたいと思います。そしてその足で玉座の間に行って、そこで最後を迎えたいと思いますが、NPC達と迎えたい人は今の内に玉座に待機させておいてください！」

即座に「了解ギルマス」や「それじゃシャルティア連れて来るか」等の声が聞こえてくる。

刃の間で眠るある人物に、最後のお別れをした一同は、その足で玉座の間へと向かった。

ナザリツク地下大墳墓第10階層「玉座の間」

攻め込まれた場合、魔王の様に堂々と迎えよう、というコンセプトで作り上げた場所である。荘厳・絢爛・威風堂々たるその場所は、まさに最後を迎えるに相応しい場所と言える。

メンバー達の最高傑作と言えるそんな場所で、メンバー達は思い思いの過ごし方をしていた。そんな中タブラ・スマラグデイナは、自身が創造した『守護者統括 アルベド』の設定の最後を変えようとしていた。

「あ、そうだ。アルベドの設定ちよつと変えちゃうか」

「え、なんで変えちゃうんですか？最後なんですし、別にいいんじゃないですか…」

「!?？」

「ちなみにビッチである!?？」

「ギャップ萌えですか…」

「深夜テンションだったんですよ…だから変えようかなど。いくらギャップ萌えがいいからと言って、ちなみにビッチである」というのはどうかと思えます」

「なるほど…まあタブラさんがいいと言うなら止めませんよ」

「ありがとうギルマス。んじや最後の設定何にしようかな？」

「おふぎけで、モモンガを愛している」とか?」

「おい愚弟、はしやぎ過ぎだ。ごめんね、モモンガお兄ちゃん」

「別にいいですよ茶釜さん。そうですね、アルベドはサキュバスなんですよ…」ギルメンを愛している」とかどうでしょう?」

「それだー!」

「モモンガさん、それ採用」

「あ、ありがとうございます」

そこでモモンガはもうすぐ時間だということに気がついた。そして仲間達とNPC達に対して最後の言葉を述べた。

「皆さん、最後に集まっていたいただきありがとうございます。とっても楽しいひと時でした。ここまで来れたのはみなさんのおかげです。

またユグドラシルⅡとかがあれば、出来れば是非皆さんとやりたいなあと思います」

モモンガの一言にメンバーからも、口々に感謝の言葉が出る。皆ナザリックの維持に奮闘していたモモンガを、労うものだった。

そしてモモンガは最後の決め台詞を言う…

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

そして時刻は過ぎた。

23：59：59

00：00：00

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

「……………はい？」

第3話 未知との遭遇 そして正義降臨【前編】

「アイNZ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

「……………はい？」

ユグドラシルのサービス最終日、最後の時を迎えようとしていたナザリックは、最後の時を迎えなかった。

モモンガは、時間になってもログアウトがなされなかった事、聞き知れない声が最後の決め台詞を言った事に、驚き戸惑った。そこでメンバー達と状況把握をする事にした。

その結果、ログアウト不可、GMコイル不可、フレンドとのメッセージ不可（通じないだけかもタブラ談）、MPCとの受け答え可、嗅覚味覚を感じる、MPCの脈あり（ヘロヘロ談）などが判明した。

また、プレアデスのリーダー『セバス・チャン』らの調査により、ナユグドラシル時代では沼地だったナザリックの周囲は、ただの平原が広がっていることが判明。それと同時に、天空城なども無くなっていることから “もしかして異世界転移とかしたのでは？” と言う認識にメンバーはなった。

最後までいたメンバーは『モモンガ』『たち・みー』『ウルベルト・アレイン・オードル』『タブラ・スマラグディナ』『ペロロンチーノ』『ヘロヘロ』『ぶくぶく茶釜』『やまいこ』『武人建御雷』『式式炎雷』の10名。

モモンガは異世界転移に巻き込んでしまったかもしれないことを謝ったが、

「来た事を選んだのは自分だし、帰れないとは限らない」

「くだらない向こうの世界よりも、こっちの世界の方がいいに決まっている」

「ナザリックがブラック企業じゃなければ大丈夫」

「こっちの世界の方が幸せになれそう。シャルティアも居るし（バキツ）ぐへ？？」

「愚弟が心配になったし、たちさんが言ったように帰れないとは限らないしね」

などの暖かい言葉を受ける。

そして至高の御方はしもべ達に言葉をかける。

モモンガ「セバス達の調査によつて、ナザリックはユグドラシルでは無い世界に転移にしたと思われる。そこでナザリックの警戒レベルを上げる。とりあえずの目標は情報の収集だ、ナザリックに対する侵入者は殺さずに捕らえよ」

たち「この世界の事がまだ詳しく分からない以上、我々以上の強者がいるかもしれないと言うことを考慮してくれ」

ウルベルト「警戒せよしもべ達、力にかまけて慢心せずに油断なく事を運べ」

ペロロン「君達に対する最上級の命令は『死なない事』だよ」

ヘロヘロ「何かあった際にはナザリックに即時撤退して下さいね」

茶釜「死んで罪を償おうなんて思わないでね」

モモンガ「今のところは以上だ、ほかに何か皆からあるか?……ん?はいタブラさん」

タブラ「セバス、確かナザリックの周囲は平原だったそうだね?周囲に丘などの起伏があったかい?」

セバス「いえ、平坦な大地が広がるばかりでございました。」

タブラ「モモンガさんナザリックの隠蔽だけど、流石にそのまんまっていうのはダメだよね?」

モモンガ「そうだな…では周囲に土などをかければ目立たなくなるのでは?」

式式遠雷「でも搜索の観点からすると、平坦な大地にいきなり丘があれば少し目立たないか?」

モモンガ「確かにそうだな。では複数のダミーを設ければさほど目立たないのでは?」

タブラ「ナイスなアイデアだと思うよギルマス」

茶釜「それじゃマーレ、そういうダミー作れる?」

マーレ「可能です。ぶくぶく茶釜様」

茶釜「それじゃよろしくねマーレ」

マーレ「かしこまりました。ぶくぶく茶釜様」

モモンガ「他に何か意見があるものはないか？……ではこれで以上とする。各員任務に励め！」

御方は指輪の力で転移した。

転移（避難）した先の円卓の間で御方は、一同に口を揃えて言う。
「あいつらマジだ」と

その頃

「リ・エステイーゼ王国」

「エ・ランテル」

「陸軍第一師団本部」

そこにある男がやって来た。

男の名は『ガゼフ・ストロノーフ』

周辺国家最強クラスと名高い戦士であり、王国陸軍近衛師団団長、通称「王国戦士長」という役職に就いている男である。

エ・ランテルには『ガゼフに匹敵すると謳われる男』王国陸軍第一師団団長『ブレイン・アングラウス』や『王国守護者』もいる。

本来なら王都防衛の要である王国戦士長は、王都から出張つて来る事などないのだが、それでも出張つて来たのは『開拓村が襲われる』という事、そして開拓村を襲うのは、「スレイン法国」の『特殊部隊』だという事、などの情報を諜報部が入手したからだ。

特殊部隊の内容にもよるが、もし神人大戦の英雄の末裔達の部隊であれば、ブレイン率いる第一師団では手に余り、返り討ちにあう可能性がある。

その為、陸軍総司令官はガゼフに対し出撃を要請。近衛師団の指揮を総司令官に託して、精鋭200名でエ・ランテルまで来たのだ。

ガゼフ「久しぶりだな、ブレイン。まだ中將のままなのか？」

ブレイン「もう大將になったさ、何回も大將になってくれたってうるさいからな。それよりもありがとうな、エ・ランテルくんだけりまで来てくれてよ」

ガゼフ「構わないさブレイン、友の為、王の為、そして国民の為に力を振るうのだ、文句などあるまいさ」

ブレイン「お前らしいな。ところであなたはどうした？来ると思っ
ていたんだが」

ガゼフ「確かに言えば来る筈だがあなたの方は来ない。たしか今はかの竜王に会う為にアークランド評議国に居る。例の件でな」

ブレイン「例の件？もうすぐ来るかもしれない神人達の事か。じいさん達曰く俺ら以上の戦力を持っていた帝国が壊滅的打撃を受けて、今の腐敗が始まったらしいからな」

ガゼフ「我々も気を引き締めて行かねばなブレイン。ところで、その特殊部隊は開拓村をもう襲撃しているのか？襲撃しているのであれば……」

ブレイン「今のところその連絡はないな、だが用心に越したことはない。どうせ明日には行くんだろ？」

ガゼフ「ああ、手始めにここを開拓村に行こうと思う。ここなら他の開拓村が襲われても、ある程度即応できると思う」

ガゼフは地図を広げてある村を指す

「カルネ村か……」

第4話 未知との遭遇そして正義降臨【後編】

忠誠の儀（になぜかなくなってしまった）を終え、至高の御方は各自で休憩や調査を実施することになった。

模擬戦、アイテムの使用変更点の調査などをやっている者は少なく、大概の者は向こうの世界では味わえなかった豪華な食事、ふかふかベッドでの睡眠、NPCとの交流（イチヤイチャとも言おう）、などのナザリック至高のおもてなしを、半分戸惑いながら、半分テンション上げ上げで堪能していた。

そんな中、骸骨魔王ことモモンガは、NPCとの交流せず（黒歴史だから）、食事睡眠をせず（てか出来ない）にナザリックの周囲を《遠隔視の鏡》で調査（見学）をしていた。

しかし《遠隔視の鏡》の操作はこの世界では難しいらしく、あれこれ試しながらの作業となった。

そんな中……………

たち「おはようございます、モモンガさん。それは遠隔視の鏡ですか？まさかずっとそれやっていたんですか？」

ウルベルト「おはようそしてお疲れ、モモンガさん」

モモンガ「ああ、たちさん、ウルベルトさん。おはようございます、よく休めました？」

たち「そう言うモモンガさんは休んだんですか？」

モモンガ「いえ、骸骨なんで食事も睡眠も必要ないんですね。疲労とかありませんし」

たち「だとしても休まなければ、この世界がまだ詳しく分からない以上無理は禁物だよ」

ウルベルト「今回は同意見だなたちさん。モモンガさん、何度も言うが、我々の異世界転移が自分のせいだと思ふ必要はない」

モモンガ「……………ありがとうございます。無理せずに休みながらやっていますね。もうブラックはこりこりですからね」

ウルベルト「まったくだよ」

会話をしながら操作方法を模索していると、突如うまくいったよう

な音がした。

ピピッ

「ん!?？」

ウルベルト「やったなモモンガさん！」

たっち「ちよつと待て、これは……………」

《遠隔視の鏡》の映像にはある村の騒ぎが映っていた

モモンガ「祭り……………じゃあなさそうですね」

ウルベルト「モモンガさん、これは戦だろ」

たっち「村かな？村を守る守備隊と村を襲撃する隊との交戦だね」

モモンガ「たしか式式炎雷さんとやまいこさんが村を見つけたか

ら、コネクションを取ってくると言っていたんですけど……………まさか

この村？」

ウルベルト「この村だろ。だってそこにいるじゃん」

そこには式式炎雷とやまいこも映っていた。

たっち「式式炎雷さんは兎も角、やまいこさんだと参戦してしまう

のでは？」

「あ」

たっち・みーがそう言った瞬間、モモンガとウルベルトは遠隔視の鏡を見る。するとそこには防衛ラインを抜いて、非戦闘員である村人を惨殺する襲撃側の騎士と、それに憤慨し今にも飛び出しそうなやまいこと、それを何とか押さええている式式炎雷が映っていた。

その時モモンガは考えた。

女性とはいえネフィリムのためどうしても異業種だとバレルやまいこよりも、一見すると騎士の様に見えるたっち・みーの方が、この村とのコネクション作りに有効なのでは？と。

しかし懸念もある。

村だけを見ると「騎士が村人を惨殺している」のだが、全体を見ると、大きい戦争の局地戦や、国同士の小競り合いとしか思えないのだ。さらにあの騎士達が自分達よりも格上だと言う可能性もある。

しかしやまいこは今にも飛び出しそうだし、いずれは現地勢力との「未知との遭遇」をしなくてはならない。ここで動いた方が襲われ

ている側の国にもいい顔が出来る。

ふとたつち・みーを見ると、心なしかウズウズしている様にも見える。全体を知っているのも有利だ。

モモンガは決断した。

モモンガ「……………たつちさん」

たつち「……………なんですかモモンガさん」

モモンガ「行ってくれますか？」

たつち「分かりました」

モモンガ「《ゲート》」

たつちはゲートに入って消えた。

モモンガ「ウルベルトさん私達も行きましょう」

ウルベルト「そうだな。見た目は悪魔でも中身はまだ人間だったって思ったよ」

モモンガ「ええ、自分もそう思いましたよ」

モモンガそう言うと《メツセージ》でもべ達にしもべ達に指示を出す。それと同時にナザリック内に居る（と思われる）ギルドメンバー達内も説明する。

しもべ達はメツセージ経由で必死に止めようとしたが、すでにたちを始めとするメンバーが動いている事、留守の間は「第6階層 円形闘技場」でコキュートスとスパリングしていた武人建御雷と、アイテム整理をしていたタブラ・スマラグディナに、ナザリックの全権を委任する事を伝えた。

タブラはモモンガから指揮を託されると、建御雷にナザリックの入り口を、ペロロンチーノにナザリック上空を、その他のメンバーには各階層で防衛に当たって貰う事にした。

「《ゲート》」

モモンガは再びゲートを発動し、たつちらの援護に向かった。今、村を襲撃している騎士たちが、自分達より格上だと言う可能性がある為と、交渉事になった際にある程度便宜が測りやすいと考えたからだ。

それに……………

モモンガ「……………後ろから見ているだけってのも嫌ですしね」
これが本音だろう
敵は格上どころでは無い事も知らずに……………

その頃、

カルネ村から少し出た森で、とある姉妹は懸命に走っていた。
姉妹の名は

『エンリ・エモット』『ネム・エモット』

カルネ村の住人である。

姉妹は、カルネ村防衛隊の防衛陣が崩壊して以降、非戦闘員まで戦
闘に巻き込まれた為、何とか逃げ延びようと考えたのだ。

母は防衛隊で交戦中、父は自分達を逃す為に囮となった。

姉であるエンリの脳内では「ネムだけでも逃がさなくては」とい
う思いでいっぱいだった。

母から身を守る術はある程度身につけているが、所詮村娘である
自分では本職の騎士には勝てない。

その時急に体が重くなる、妹がこけたのだ。

「追いつかれた」

エンリは咄嗟に妹を庇う。

そしてその直後、背中に焼けるような痛みが走る。

この時エンリは覚悟を決めた。

「ネムが逃げられるだけの時間を稼いでみせる」と

エンリは母から教わった拳で反撃を……………

そこで異変が起きた、騎士の動きが硬直したのだ。

後ろを見るとそこには白銀の鎧を身に纏った騎士が立っていた。

??「誰かが困っていたら助けるのは当たり前！」

《正義降臨》

ババーン!!

エンリ「……………」

「弱過ぎる」

これがたつちやモモンガ達の感想となった。

村娘の危機を救う際に襲撃側の騎士を切り捨てたのだが、攻撃してきた騎士の剣を受けようとしたら、その剣は切れ、その勢いのまま騎士まで切ってしまったのだった。

モモンガにしても第5位階《ドラゴンライトニング》を（本人は手始めとして）打ったところ、騎士にあっさり直撃し、即死したのだ。姉妹の怪我を治療し共に村まで出向いた先には、半分狂戦士化しているやまいこと、騎士に対して尋問をする式式炎雷がいた。

やまいこ「防衛隊の人や大人たちはまだ分かるけど、子供達まで殺す必要ないでしょ！若い娘と見れば見境なく襲いかかって！絶対に許さない！この私が成敗してやる！」

炎雷「待て待てその気持ちは多いに分かるが、全滅させたら情報が引き出せないだろ!??.....おいアンタあんな末路になりたくないなら早く所属、目的、理由、人数を言うんだな」

騎士「は、はい、言わせていただきます！」

尋問と言う名の質問に対し、騎士はペラペラと話した。

その結果

騎士達は「スレイン法国」の者だと言う事

この格好は「帝国」の騎士だと思わせる為

目的は「王国戦士長 ガゼフ・ストロノーフ」の抹殺

理由は、人類の裏切り者である「王国」の力を削ぐ為と、ガゼフが持つてくるかもしれない「宝具」を「取り上げる」為

人数は、自分は末端の人間だから詳しくは分からないが、特殊部隊は30人ぐらい

ということがわかった。

モモンガ「取り上げる？奪うの間違いだろうか？」

たっち「もし帝国がこの事を知ったら、自分達がだしに使われたと思つて、関係が悪くなるんじゃないか？」

やまいこ「まあ待つて。ねえあなた、王国が人類の裏切り者つてど

う言う事？」

騎士「それは王国が、亜人種も傘下として『共存共栄』などと謳っているからです。亜人種は人類の敵。それを王国は、自分達は豊かな国土を持つて居るからと言って、リザードマンやエルフなどという亜人種と仲良くしている。帝国は腐敗していますが、王国はそれ以上に、亜人と仲良くしている危険な国だと考えたのでしよう」

ウルベルト「つまりは俺らも敵か」

炎雷「なんだそれ？いい国じゃんか、亜人との共存共栄。平和が一番じゃないのか？」

騎士「我々スレイン王国は人類の護り手なのです！亜人種であり人類を滅ぼしうる『ビーストマン』と戦えば分かります。奴らと戦えば王国が如何に考えていないか分かります！」

??「分かっているとも。だからこそビーストマン包囲網を築こうとしているのではないか」

「!??!」

そこには馬にまたがった騎士の男がいた。

モモンガ（そう言えば違う騎士の隊が向かっているって言ったな）「あなた方は？」

モモンガは尋問の前に別の騎士隊が村に接近しているとの報告を受けていたことを思い出した。

??「私は王国近衛師団団長 ガゼフストロノーフ 階級は大将」

ガゼフ「開拓村を襲っている襲撃者を討伐しにきた、王国の軍人だ」

村長「あなた様が王国戦士長でございますか？」

ガゼフ「その通りだ。君がカルネ村の村長だな？防衛隊はどうしたのだ？」

村長「……………防衛隊は隊長以下玉砕しました」

ガゼフ「……………そうか、村にまで被害が出たところを見ると、もしやと思ったが……………」

ガゼフ「彼らこそ騎士の鏡だ。彼らには階級特進と勲章、遺族には彼らの代わりに、報奨金と慰霊金を出すよう総司令官に必ず伝えよう」

ガゼフは防衛隊が玉砕した事を聴くと、騎士の礼を取り、彼らに祈りを捧げた。

ガゼフ「それで村長、その方々は？」

村長「ああ、この方々は……………」

モモンガ「それには及びませんよ村長。初めまして王国戦士長殿。私の名はモモンガ。この村が襲われているのを見て助太刀にきた魔法詠唱者です。そしてこの者達は私の大切な友人です。」

モモンガはそう言ってたっちややまいこ、式式炎雷を紹介した。

ガゼフはこの世もこのような御仁達がいるのだなと思い、王国軍人として、騎士として、恥ない礼を尽くすべきと思いい馬を降りそして……………

ガゼフ「この村を救っていただき感謝の言葉もない！本当にありがとう！」

頭を下げ、感謝を伝えた。

「ありがとうございます！」

配下の兵達も続く。

モモンガは驚いた。仮にも師団を預かる人だ、しかも大将だという。『そうか、ありがとう』ぐらいだと思っていたのだ。

まして……………

モモンガ「礼など入りませんよ。しかし戦士長殿、最早お判りだろうが、我々は異業種ですよ」

モモンガは『仮面を付け忘れていた』し、たっちや式式炎雷は兎も角、やまいこもネフィリム、一目で異業種だとバレる。

実際、さっきの騎士からは警戒、恐怖があった。

だが、この村も戦士長も何ら変わらない態度だ。モモンガは不思議だった。

ガゼフ「確かにあなたは自分の眼では骸骨に見える。だが、あなたは私とこうして話をしている。故にあなたは見た目が骸骨だけで、中身は立派な人間だと自分は思う。増してやあなた方はこの村を救ってくれた。これに感謝をしないのは王国に恥を晒す事になる」

故にあなた方は異業種などではない、我々王国は、私は、あなた方

を友人として見る。それが我々の国是だ。

その一言を受けモモンガは感動を覚えた。必ず警戒され、最悪討伐しに来るかも、と思っていたからだ。

その時

??「ガゼフ!!」

ガゼフ「どうした? ブレイン」

ブレイン「この村を包囲する形で兵隊が来た。兵士からは天使が見えたとの事だ」

たちち ブレイン「この方は?」

ガゼフ「ああ、この者は『ブレイン・アングラウス』王国軍第1師団の師団長。ブレイン、この方々が村を救ってくれたそうだ」

ブレイン「ブレインだ、よろしく頼むぜ。そして、この村を救ってくれてありがとう! エ・ランテルに来たらいつでも俺を頼ってくれよ!」

ガゼフ「それでブレイン、天使を見たと言ったな?」

ブレイン「ああ、という事はだ……」

ガゼフ「ああ、読みが的中したな」

「相手はスレイン法国の陽光聖典だ」

第5話 戦士長の強さに、ニグン死す

ガゼフ達には懸念事項があった。

それはスレイン法国の特殊部隊が、何聖典かだった。

王国の諜報部が掴んだ情報では、六色聖典の内、開拓村を襲撃する為に、動ける聖典は2つ。

六大神の末裔の噂があり、法国の宝具を持ち、王国も詳しく把握してない六色聖典最強の「漆黒聖典」

天使達を多数召喚し、魔法攻撃を主体とする「陽光聖典」

もし、漆黒聖典が相手だったならば、ブレイン達第1師団では無理だろう。いや、ガゼフとブレインが組んでも勝算はかなり低いだろう。

現状、漆黒聖典と戦えるのは「王国の守護者」の6名と「王国の創設者の娘」しか居ない。

一方の陽光聖典はと言うと、召喚した天使達による突撃、魔法師達の魔法攻撃を主体としているため、ブレインとガゼフが組めば勝利確定と言ってもいいだろう。

ガゼフには歴代の王国戦士長に伝わる神器がある。

ブレインも宝具を有している。

だからガゼフ達は懸念していたのだ。漆黒聖典が相手になるかもしれない。だが、相手となったのは陽光聖典だった。

何故か。

それは、スレイン法国が何よりも恐れている相手である『王国の創設者の娘』がやって来ると思ったからだ。

彼女と一戦交えるのには、漆黒聖典だけでは足りない。

そうスレイン法国は判断している為だ。

こうしてガゼフ達の懸念は、嬉しい形で外れた。

あとは陽光聖典を片付けるだけだ。

「総員傾聴……獲物は檻に入った」

この者は知らない、待ち受ける運命など。

ガゼフ「モモンガ殿、貴公にお願いがある」

ガゼフは覚悟と作戦を決めた。その為、ここに居る圧倒的な強者に願ひ出た。

(手伝って欲しいのか)

モモンガはそう思った。しかしガゼフの次の言葉は違った。

「我らが打って出ている間に、この村を守って欲しいのだ」と
そしてこう続けた

「私はブレインと共に打って出ようと考えています。部下も置いて行きます、村を守らせる為に。ですが部下達だけでは足りないかもしれない、ですから貴公達にも村を守っていただきたいのだ」と

「やはりか」

同じ騎士としてか、たっちはそう思った。

死を覚悟したのかと

しかしガゼフからすれば、この判断は万が一の布石としてだった。自分達だけでも陽光聖典には勝てると思う、それに漆黒聖典が来ないとも限らない、ならば目の前にいる自分達より強い御仁に、村を防衛していただいた方が良いと考えたのだ。

当然報酬の提示も忘れずに。

モモンガ「分かりました戦士長。アインズ・ウール・ゴウンの名に懸けてこの村を守って見せましょう」

ガゼフ「ありがとうモモンガ殿。では後顧の憂い無く、連中を蹴散らすことが出来ます」

こうしてガゼフはブレインと共に出撃した。

ニグンは驚いた。

目の前に来たのはたった2人だけだったからだ。

だが当初の目的は変わらない。むしろ達成しやすくなった。
好機だ：

そう思った。

ニグン「2人だけとは、大きく出たなガゼフ・ストロノーフ、そしてブレイン・アングラウス。王国屈指の実力者と言えども、我らの前では勝ち目はないと、分からなかったのか？」

ガゼフ「分かっていたさ、だからこうして2人で来た」

ニグン「村人達の命乞いでも来たか？」

ガゼフ「そうだと言ったら？」

ニグン「ふん！見逃す筈は無かろう。奴らを人質にし、今後は王国守護者を倒すまでよ」

ガゼフ「そうか：残念だ。お前たちでは王国守護者は倒せないだろう。いや、今あの村にいる御仁達にも勝てないだろう。そして：私達にも！」

ニグン「!?？」

ガゼフ「行くぞブレイン！」

ブレイン「ああ！」

ブレインはガゼフから距離を取る。これからガゼフが行う行為に巻き込まれるかもしれないからだ。

ガゼフは白く輝くバックルを取り出し、腰に当てた。

バックルはガゼフの腰に装着され、ガゼフはカードを取り出した。

ガゼフ「変身！」

ガゼフはカードを挿入し、セットする。

バックルから音声が出た

《LBXライド…

そのままスキャンをする

：ソルジャー》

直後サークルが出現し、アーマーが出る

アーマーはガゼフに纏わりつき、ガゼフはついさっきまでの鎧では無く、見事な鎧を身に纏った。

最後に鎧全体が光り輝き、変身は完了した。

ガゼフ「俺は王国戦士長！この国、この国民を守る者！そしてこれが、歴代王国戦士長に伝わる伝説の鎧、ソルジャーだ！」

ニグンは驚愕した。

慌てて攻撃命令を出すのが時既に遅く、天使達は瞬く間に屠られた。

ガゼフ「これで終わりだ！」

《アタックファンクション ドラゴンインフェルノ！》

そして、切り札である最高天使を召喚する事もなく、ガゼフの必殺ファンクションによって倒されたのだった。

「あ、あり得ない。なんだとー」

「な、なんだとー……」

「!?」

だが驚愕をしたのはニグンだけでは無かった……

王国編

第6話 冒険者【前編】

☒? 「冒険者って夢の無い仕事なのか?」

☒? 「まあまあ」

☒? 「私も、その仲間達も、実力に見合った依頼をこなしたい」

受付嬢 「申し訳ありません、ですが規則ですから」

☒? 「…………分かった、無理を言ってすまない。では我々が受けられる依頼の中で、一番難易度が高い奴を持ってきてくれないだろうか?」

受付嬢 「分かりました。少々お待ちください」

☒? 「では私達の仕事を手伝ってくださいませんか?」

「二な、なんだとーとーとー」

カルネ村と未知との遭遇をし、村を守った。

その対価は

- ・ この世界の住人は、極一部を除いてかなり弱いという事
 - ・ 神人なる連中が昔いて、其奴ら間違いないくプレイヤーだと思いう事などが情報で支払われた。
- だが

メンバー達にとって最も重要な情報は《ソルジャー》と《LBXドライバー》がある事、何故か王国がそれを有している事だろう。

《ソルジャー》と《LBXドライバー》それはかつて、ナザリックに所属していた最強のギルメン『フィロ』が持っていたものだ。

フィロが《DXライダーベルト》を元に作ったそれらは、間違いないくオンリーワンな物だ。

クソ運営が課金ガチャアイテムとして世に出したDXライダーベルトは、加工が難しい、作成にはリアルスキルが求められる、それに

見合ったアイテムが無い、使用中は自身のスキルが上手く使えない、などのデメリットが多く、レア過ぎて当てた人も少なく、実際に使用できたプレイヤーは数少ない。

まさか盗まれたのか!?!?

不可能だと思いつながら、フィロ亡き後に作った『保管用のある場所』を確認すると、なんと実際に無いではないか。それにLBXドライバー以外にも無くなっているアイテムがある。

「申し訳ありません!この罪は死んでお詫びするほか……」

フィロのアイテムを守っていたNPCの悲痛な死の贖罪を、全力で止めた後、とりあえずギルメンで会議を開いた。

会議の結果、とりあえず王国を滅ぼしてLBXドライバーを奪還するのは見送ることにした。

フィロが作成したLBXドライバーは『白い試作機』『青い予備機』『銀の本機』の3つ。

その内、無くなったのは白と銀。

ガゼフが持っていたのは白の試作機、では銀の本機は何処へ?

それにやって来たばかりのナザリックに侵入し、あれを使用するのは難しいだろう。フィロのアイテムは、ナザリックでも最強クラスのメンバーが守っているので尚更だ。

そして、LBXドライバーを持つている王国には「特別な何か」がある。その為、むやみに滅ぼす様な事は出来ない

また、もし滅ぼす事になっても王国の事が分かってなくては、万が一が起きるかもしれない。

よく調査するべきだ。

いやまさかだが、フィロも来ているのか?ならばフィロのアイテムが無くなっているのが分かる。

だがフィロはあのときに死んでいる筈だ。

しかし現に、フィロのアイテムが一部無くなっている。

その為結論としては、フィロのアイテムの行方、フィロの生死の確認を含め、王国に潜入し、調査するべきだという事になった。

ではどうやって潜入調査をする?

そこで行われたのが、冒険者大選抜会だった。
いつの時代も、王道の決め方である『ジャンケン』をもって決められた冒険者メンバーは……………

騎士として『たち・みー』

弓兵として『ペロロンチーノ』

魔術師として『ウルベルト』

ブレイキ役として『やまいこ』

となった。

またそれ以外のメンバーも役割を決めた。

商人として潜入……………タブラ・スマラグディナ

索敵……………式式炎雷

ナザリック防衛……………武人武御建・ぶくぶく茶釜・へろへろである。

またモモンガはナザリックにいる予定だったが、本人の珍しいわがままが通り、騎士としてリーダーとして冒険者となった。

ちなみに騎士になった理由は、死霊系魔法を使うのは避けた方がいいのと、王国側に冒険者として来た事を隠すためだと言う事だ。

ちなみにNPCからの反対は無視した。

プラチナ級冒険者チーム『漆黒の剣』との《ゴブリン狩り》は、薬師の『ンフィーレア・バレアレ』のご指名で《トプの森での薬草採取の護衛》に変わった。

道中、ゴブリンとの戦闘（といっても瞬殺）カルネ村でのひと騒動（ンフィーレアにモモンガだとバレた）森の賢王と名乗るハムスターを仲間にした（物理で）などがあったものの、特に何事も無く依頼を達成した。

だが依頼はもうひと騒動起こしたのだ。

☒? 「ンファイレーアちゃん帰って来たんだ。んじゃ、攫っちゃおうか」

☒? 「気を引き締めてかかれよ、ここは王国、守護者に気取られない様にせよ」

☒? 「分かってるよカジツちゃん、流石に守護者には私も苦戦するだろうしね」

☒? 「何をしているのかは分かりませんが、王国を汚そうという者は我が主人の命により、消させていただきますね」

第7話 冒険者【後編】

エ・ランテル冒険者ギルドによろこそ！

フィロの生死を確認する為、世界の情報を得る為、王国に潜入する事になったモモンガ達はエ・ランテルにいた。

ちよつとした試験の結果によって《最初のプレート》が変わる為、モモンガ達は実力を、ほんの少しだけ“出さなくてはならなかった。

その結果、いきなり《プラチナプレート》となったモモンガ達だった。

受付嬢曰くここ数年は無い事例らしく、冒険者チーム『オウンゴール』は期待の大型新人となったのだ。

名前を《オウンゴール》にした理由は簡潔極まりない、フィロにアピールする為だ。

さていよいよ最初の依頼を受けるにあたり、『オウンゴール』リーダーのモモンには大きな壁があった。

モモン「も、文字が読めん」

そうナザリックのメンバー全員が、現地の文字が読めないのだ。

解読が出来る眼鏡はあるのにはあるのだが数が少なく、大型新人となったモモンには文字が読めないなどという、イメージダウンになるかもしれない行為は避けるべきだった。

その眼鏡は一部の者しか持っていない。

モモン「ええい、ままよ！」

なんか書いてある依頼書とおぼしき紙を手に、モモンは受付に持つていく。

だが

受付嬢「申し訳ありません、モモンさん…この依頼書は、ミスリルクラスの方を対象にした依頼書です。残念ですがモモンさんには依頼出来ません」

モモン「分かっている、だからこそ持ってきたのだ」

受付嬢「え？」

モモン「確かにこの依頼書は、ミスリルクラスを対象にしているの

だろう。だが私達はそれに見合う実力を有している。私や仲間達もその実力に見合った依頼をこなしたいのだ」

受付嬢「確かにモモンさん達はそれに見合う実力を持っているとは思いますが、申し訳ありません規則ですから」

モモン「…分かった、無理を言ってしまうって申し訳ない。早まった真似をしてしまったな。では私達が受けられる依頼で一番難易度が高い奴を頼む」

モモン（よし！誘導成功！）

心なしか仲間達もサムズアップしている気がする

誘導し受付嬢が依頼を持つてくる待っていると…

☒？「では私達の仕事を手伝っていただけせんか？」

モモン「あなた達は？」

???「僕達は『漆黒の剣』と言います」

冒険者が仕事の話を持ってきた。

漆黒の剣と名乗る冒険者達が持ってきた仕事は、エ・ランテル周辺の魔獣達を狩る仕事だった。

王国の冒険者達にはそれぞれの實力ごとに階級が存在する。

「カッパ」

冒険者の見習い 魔獣との戦闘は許可されない

依頼は勤労奉仕やお使いなど

「シルバー」

冒険者の新人、このクラスから魔獣との戦闘が許可される

依頼は薬草採取や下位のモンスター討伐など

「ゴールド」

下位冒険者、護衛任務が許可される。

「プラチナ」

中位冒険者 冒険者が最初に慣れる最大の階級

最初からプラチナの冒険者は《ファーストプラチナ》と呼ばれる

「ミスリル」

上位冒険者 このクラスから未知への挑戦が許可

“オリハルコン”

最高位冒険者 国を超えての依頼が許可

“アダマンタイト”

最高位冒険者 王国では3チームのみ

この内モモン達は、前例のチーム全てがアダマンタイトになったという《ファーストプラチナ》ということだ。

漆黒の剣はプラチナになったばかりだが、エ・ランテルではそこそこ名が売れている冒険者で、チームリーダーでメンバーは戦士のペテル、野伏のルクルット、魔法詠唱者のニニヤ、森祭司のダインである。特にニニヤは魔法習得が半分で済むという《タレント》を持つ事で有名だった。

《タレント》とはその人固有のスキルのようなものらしく、ニニヤの様なものの他、明日の天気分かるだとか、相手の魔法力が分かるだとかがある。

ニニヤ曰く、この都市のはもつとすごいタレント持ちがいるらしいが……

顔見せも終わり、いざ出発しようとした一行だが受付嬢に止められる。なんでもご指名の依頼があるそうだ。

ご指名の依頼とはいえ先に仕事の話をしたのは漆黒の剣、モモンは断ろうとするが、その漆黒の剣から話を聞くだけでもと言われ一行は依頼主に会う。

依頼者は都市一番の薬師『インファイア・バレアレ』だった。

インファイアがオウングールに依頼を出したのは当然理由があった。

モモン達が宿に行った際、やまこに対し絡んできた冒険者がいた。

だが当然の如く返り討ち、愚かな冒険者は“青いポーション”をニタニタと眺めていた女冒険者のテーブルへと吹っ飛ばされた。

女冒険者ブリタはモモン達にポーションを弁償して欲しいと言い、厄介ごとに巻き込まれなくなかったモモンは“赤いポーション”をブリタに渡したのだった。

話はここでは終わらない。

ブリタは見知らぬ赤いポーションを怪しみ都市一番の薬師と言われているリイジー・バレアレの元に持ち込んだのだ。

そして行われたやり取りは以下である。

リイジー「ンファイヤー、珍しい物が来たぞ！」

ンファイヤー「おばあちゃん、このポーションって」

ブリタ「え、これってそんなに凄い物なの？」

リイジー「真のポーションは神の血の色をする。ンファイヤーよ、このポーションを渡した冒険者に依頼をして、錬成方法を探るのじゃ！」

ンファイヤー「うんわかったよおばあちゃん、僕やるよ」

以上が事の顛末である。

ンファイレーアの依頼はカルネ村の近くにあるトプの大森林での薬草採取、そしてその護衛である。

依頼自体はタチミーの案で漆黒の剣との合同依頼とした。

道中、森の賢王なるハムスターをペットにしたいと言ったやまこが説得（物理）し見事従えるという珍騒動があったが、難なく依頼完了となった。

だが、この依頼はとんでもない自体に発展する……

なお、ンファイレーアにモモンがモモンガである事がバレた。

ここはエ・ランテルの共同墓地

深夜、誰も来ないはずの墓地に1人のリツチっぽい男が居た。

一見すると老人にも見えるハゲの名前は『カジット・デイル・バダ
ンテール』

秘密結社『ズーラーノーン』の幹部、十二高弟の1人だ。

そんなカジットを尋ねる、場違い女が来た。

???「カジットちゃんいる？」

カジットちゃん「その名称はやめんか、クレマンティーヌ」

場違い女の名前は『クレマンティーヌ』カジットと同じくズーラー
ノーン十二高弟の1人だ。

そしてスレイン法国特殊部隊、漆黑聖典の元メンバーだった。

クレマン「ええ？別にいいじゃん」

カジツちゃん「まあいい、それでなんのようだ？」

クレマン「お土産、持ってきたんだよ」

カジツちゃん「それは！《叡者の額冠》！スレイン法国の宝具ではないか」

《叡者の額冠》とはスレイン法国の宝具の1つで、使用者の自我を封じる代わりに超高等魔法をも使えるアイテムにするという物だ。

だが叡者の額冠は使用可能な「女性」が百万人に1人だけなので、本来なら宝の持ち腐れなのだが：

クレマン「そうだよこの都市のは制限なしでマジックアイテムを使えるタレント持ちがいるじゃん」

カジツちゃん「ああ、薬師のンフィーレアとかいう奴だ」

そう、エ・ランテルには《あらゆるマジックアイテムを使える》というタレント持ちンフィーレアがいるのだ。

クレマン「うんうん、そいつを拉致って使用させれば、第8位階の魔法も行使できるでしょ？」

カジツちゃん「うむ！この都市を死の都市に変えてくれる！だが、奴らが嗅ぎつけていないだろうか？」

クレマン「奴ら？」

カジツトには懸念事項があった。

王国で悪さをしようとした秘密結社を潰した存在の事だ。

カジツちゃん「知っておろう、《王国守護者》だ。確かこの都市に居るだろう」

クレマン「居たね、確か《黒の守護者》だ」

腐ってもクレマンティーヌは元漆黑聖典のメンバー、王国最大の脅威ぐらい聞いていた。

カジツちゃん「守護者は全員がとんでもない奴らばかりだ」

クレマン「正直言ってあんまり戦いたくないね」

カジツちゃん「気を引き締めかからねばな」

エ・ランテルの中に不思議な建物がある。

日本の屋敷に見えるその建物は、とある理由の為にあった。
中に居たのは1人の女性。

濡れた様な漆黒のおかつぱ髪

クロアゲハの髪飾り

漆黒に蜘蛛の巣の紋様があしらわれた着物

脇にはこれもまた漆黒の刀

彼女こそ王国守護者の一角『黒の守護者』だ

そんな彼女がニコニコ顔を隠せずに、誰かと会話をしている。

「かしこまりました、我が主人様。何事にも警戒ですね」

「うん、よろしくねクロ。もしプレイヤーらしい人がいても、接触だけにしてね。ただ悪さをしようとしてたら……わかってるね？」

クロと呼ばれた女性は、ふれいやーがいつ来るか友人に相談しに行つた主人からの指令を受ける。

クロ「わかつております、排除致します」

主人に大恩がクロは、即答で答える。

「???」「ありがとうございますクロ、僕もツアーとの話し合いが終わったら王国に戻るからね」

クロ「もつたいないお言葉です。ご帰還をお待ちしています」

ありがとうの一言に感動し、早く帰って来て欲しいと切に願うクロだった。

だが、時には真名で呼んで欲しいとも思うクロだった。

第8話 王国守護者 黒

モモン達は森の賢王（命名ハムスケ）をペット登録……ではなく魔獣登録をしに冒険者ギルドへ向かう。

その間、漆黒の剣とンファイレアはンファイレアの店に採取した薬草を降ろしに向かった。

冒険者ギルドに向かう途中、モモンはリーダーだと言うこともありハムスケにまたがるのだが：

ペテルやンファイレア等はハムスケを、叡智を感じるだとか、なんて立派な魔獣だとか言っていたが、モモン達からすれば所詮「ちよつとだけ強い」でっかいジャンガリアンハムスター。

ハムスターにまたがるモモンを、街の人達はすわ英雄の凱旋か？と口にするが、モモンからすればいい歳したおっさんがメリーゴーランドに乗っている感が否めない。

事実、ウルベルとペロロンはニヤニヤが止まらないし、タチミーは背中だけしか見えないため様子が分からないが、肩が震えている。

ペットにした張本人は漆黒の剣と一緒にバレアレ店に行った。

モモンの凱旋はまだ続く、モモンガの珍道中もまだ続く。

モモン達オウンゴールの英雄伝が増えたのだった。

そしてモモンガの黒歴史がまた一つ増えたのだった。

だが彼らは気がつかない。

彼らを好奇の目以外で見ている女性を：

夜だと言うこともあり、ほぼ完全に周囲に同化したその女性を。

??? 「南の魔獣!? あれを支配するの…奇妙な人達、あの人達が神人かもしれないわね」

黒い和服に黒い武器を持つ彼女は、リ・エステイーズ王国に6人しか居ない存在、『王国守護者』

王国創設者の直属の部下だった守護者達は、人智を超えた実力を有し、たった一人で王国陸軍全戦力に匹敵すると言われている。

王国創設者が死んだ今でも、王国に魔の手が迫ればその力は発揮さ

れ、王国の抑止力として動く。

『クロ』という名を持つ彼女は現在王国、帝国、法国の国境に位置する王国第二の都市、エ・ランテルに拠点を構えていた。

そして、今なお忠義を尽くすべきと考える唯一無二の存在から指令を受け、神人かもしれない奴を探っていた。

クロ「彼らを見張るべきかもしれないけど、今はあそこに行かなくてはならないわね」

—
そう言いクロは姿を消した。

「さつきまで居たかわいい子ちゃんがないのは残念だなあ〜」

「さつきとやらんかクレマンティヌ！」

「はいはいカジツちゃん、分かっていますよーだ」

目の前にいる老人と女性がそんな会話をする。その言葉から余裕があるのが見て取れる。

だが彼らには、漆黒の剣にはそんな余裕ある筈ない。

店に着いた漆黒の剣とンフィーレア、やまこは荷下ろしをしていたが、途中リイジーの手が必要となった。

その為かわい子ちゃん：やまこは店に居なかったンフィーレアの祖母、リイジー・バレアレをニヤと探しに向かった。

しかし二人が店から出た直後、ハゲの老人とマントを羽織った女性が現れたのだ。

しかもンフィーレアを拉致すると明言して。

その為ペテル、ルクルツト、ダインの三人でンフィーレアを守らなくてはならない。

しかしそれはかなり絶望的な戦いとなる。

女性の方がかなりの手練れだと思われたからだ。

(ンフィーレアだけでも逃すべきだ)

そう判断した漆黒の剣は行動に移す。

ペテル「ンフィーレアさん、逃げてください！ここは私達が食い止めます！」

ルクルット「ニニヤとやまこさんと合流しろや！」

ダイン「急ぐのである！」

ンファイ「皆さん……」

クレマン「ああ〜お涙頂戴ねーお姉さん感動しちゃった。でも……勝てるわけないだよね！」

漆黒の剣の絶望的な戦いが始まった。

—————

バレアレ薬品店に向かっていたその道中、ンファイレアの祖母であるリイジーと出会ったモモン達。

リイジーと一緒に探していたやまこが合流し、”叡智溢れる森の賢王”にまたがるモモンを、何故か大爆笑し可愛いを連発するというニニヤには全く賛同出来ない事があった。

ニニヤ（皆さん流石だな……）

可愛いよね！とやまこに賛同を求められ、ニニヤが思ったのはこの一言だった。

一部ほんわか、一部失笑という賑やかな空気が流れていた中、リイジーと共に先行していたペロロンが流石の反応速度を見せる。

ペロロン「ストップだみんな、なんか血の匂いがする」

ペロロンチーノの種族はバードマン、例え人化の指輪で人種になっても、その感覚は失われてはいない。

血の匂いがする場所：バレアレ薬品店。

警戒しながら突入した先にあったのは無惨な死体となったニニヤ以外の漆黒の剣のメンバーだった。

そして、店にンファイレアの姿がない。

死体となった仲間を見て卒倒するニニヤ、孫を探して取り乱すリイジー。

その様子を見てモモンガは呟いた。

”すこしだけ、不快だな”

頷くオウンゴールのメンバー。

ウルベルトはリイジーに対して持ち掛けた。
”依頼したらどうだ？お孫さんを救えるのは我々だけだ”
孫の危機にリイジーは迷わなかった：

—————

リイジーとニニヤを守る為へロへロ、やまいこを残し、モモンガ達は
ンファイレアの奪還をする。

モモンガにとってンファイレアの居場所を特定するのに時間は掛
からなかった。

その結果、ンファイレアはエ・ランテルの共同墓地に居る事がわ
かった。

しかもアンデッドの大軍という”オマケ付き”で。

共同墓地から溢れだそうとするアンデッドに対して、守備隊は陸軍
に伝令を飛ばした。

そんな中、4人の冒険者がやって来た。

何の躊躇もなくアンデッドの大軍に飛び込みにあつという間に殲
滅した彼らはきつと英雄になるだろう。

少なくとも守備隊の隊長はそう思った。

しかし隊長には未来の英雄に呆けている場合ではなかった。

??? 「門を開けてくれませんか？」

隊長「あ、あなた様は…」

—————

ハゲの老人：カジットとその弟子達は《死の宝珠》を使いエ・ラン
テルを死の都市にしようと企んでいた。

どこからどう見ても黒幕っぽいそいつらにモモン達は近付いて行
く。

弟子「カジット様、奴らが来ました」

”はい、バカ確定”

モモンは思わずそう言ってしまった。

ペロロン「いい夜だね”カジット”儀式やるにはちよつと勿体無いんじゃないか？」

カジット（馬鹿者が…）「ふん、儀式をやるかやらないかなど、わしが決めるのだ」

タチミー「だがその儀式も失敗に終わったようだな。罪なき人々を襲うなど言語道断！」

カジット「やかましい、これも我が宿願の為。邪魔立てするならば潰すまでよ」

モモン「ところで、お前らの仲間には刺突武器を持った奴が居るだろう。出てこい」

モモンの一言に、神殿から女性が現れた。

クレマン「ふくん、あの死体を調べたんだ？もしかしてお仲間だった？あ、あたしの名前はクレマンティーヌ…よろしくね」

モモン「そうかこれはご丁寧に、我らは冒険者『オウンゴール』という。そして彼らが仲間かという疑問についてだが…」

ウルベル「残念ながら違う。だが奴らにはやって貰わなくてはならない仕事だ、計画があったのだ」

モモンガ達が漆黒の剣に期待していたのは、自分達の名声を高める事だった。

確かに森の賢王を使役させ、途中出てきたオーガを簡単に切り捨てるのを目撃している彼らなら、いい宣伝役になるだろう。

だが彼らがニヤを残し壊滅したことで計画が狂う可能性があった。

それ以外にもモモンガ達が不快な理由があるのだが…

モモン「さて、じゃれあいはこちらまでにしよう。クレマンティーヌとやら、我々はあちらで殺しあわないか？」

タチミー「私も一緒に行きます」

クレマン「んふふ…おっけー」

モモンとタチミーはクレマンティーヌと名乗る女性と離れていった。

ウルベル「では俺達があそこに居るハゲの老人を相手しよう」

カジット「どうやら英雄級の馬鹿者らしいな、それにわしは見掛けより若いわ!」

ペロロン「んじゃ、ハゲおじさんだな」

カジット「……………」

カジットはハゲを否定しなかった。

—————

ウルベル「さていくか、《電撃球》《エレクトロスファイア》」

カジット「何!」

ウルベルが放った電撃球はそのままカジットらに向かい直撃、しかし焼き焦げたのは弟子達でカジットは健在だった。

その理由は…

カジット「ふん、馬鹿者なのは当たったらしい。こちらには魔法に対して絶対耐性を持つ《スケリトルドラゴン》がいる!」

その名の通り”ザ・骨ドラゴン”な見た目の”魔法に対して絶対耐性持つ”スケリトルドラゴンがカジット側に居るからだ。

しかし、ウルベル達は余裕を崩さない。

ウルベル「絶対耐性?それって第6位階までの魔法の無効化じゃないのか」

ペロロン「自分が召還した奴の特性も知らないのか…」

そう、スケリトルドラゴンの魔法耐性は絶対耐性ではなく第6位階までの魔法を無効化するというもの。

ウルベルからすれば第7位階魔法を放てば良いだけの話だ。

その為…

ウルベル「さっさと終わらせるか」

ウルベルはそう言い放ち、必殺の魔法を叩き込もうとした瞬間。ドドーン!!

突然の雷鳴が響き、スケリトルドラゴンは黒い稲妻によって破壊された。

カジット「何だと!?!」

ペロロン「流石だな！」

カジットはご自慢のスケリトルドラゴンが破壊され呆然とした。
ペロロンはウルベルの《黒稲妻》が炸裂したと思いウルベルに近付いた。

しかし：

ウルベル「いや待てペロロン、俺じゃない」

ウルベルは自身が魔法を発動していなかったことで、周囲を警戒しペロロンを近付けさせなかった。

ペロロン「は!?! あれ十八番じゃん違うのか?」

確かに《第8位階魔法 黒稲妻》はウルベルの十八番としてユグドラシルで使っていた魔法だった。

そしてカジットは黒色の稲妻を見て気が付いた、奴が来た。

そしてそれは正解だった。

???「あら?もしかして余計なことをしましたか?」

カジット「流石と言うべきか、黒の守護者」

そこには：

クロ「お初にお目にかかるわね王国黒の守護者、クロと名乗る者ですわ」

王国守護者 黒がいた。

第9話 漆黒の一撃

「君はこれから○○・○○○○だよ」

「コードネームはね…クロ、かな」

「エ・ランテルを…王国を…頼んだよ…」

私は○○。

大きな黒い○○。

そして私は”災害”だった。

僅かな理性も振るわれる力も、殺戮と、収まらない食欲に消える。

誰も止められず自らも止められず、満たされることのない食欲のままに、破壊と殺戮そして食事をする。

それが何百年も続いた。

いつしか私は『黒の災害』と呼ばれた。

しかしそんな悪夢に終わりが訪れた。

目の前にあるのは出来たばかりの国、目の前に居るのはこれまで見たこともない、圧倒的な強者のオーラが漂う少年。

「これ以上進めば君を切る」

その少年はそう言い放ち、私はその警告を無視した。

「来るか、黒の災害、レイドボスよ。ならば加減はしない」

そして彼はカードを取り出し…

「変身！」

《カメンライド AX》!!

カードをバックルに差し込み、スキャンした。

直後、少年の周りに半透明なカードが出現し、彼の元で一つになった。

最後に胸元のXのマークと目の部分がひかり、私が見ても凄まじい力を持った鎧を身に纏った。

そして私は…ようやくやぐ止まりました。

それ以来私はあの方の為に存在し、力を使うと決めたのだ。

孤独を、飢餓を、殺戮を止め、仲間をくれたから。

だから今回も、私はあの方の為に、この国を汚そうとするあそこのハゲを消し炭にして、この世界を汚そうとするかもしれない”こいつら”に警告するのだ。

王国守護者は、世界の抑止力は健在だと。

—————

カジット「やはり来たか黒の守護者、だがわしは諦めんぞ！我が宿願の為に貴様にも死をもたらす！輝け《死の宝珠》よ！ 出でよスケリトルドラゴン！」

カジットには分かっていた。

魔法に絶対耐性を持つこのドラゴンでさえ、彼女にとっては前菜に過ぎないということ。

現に先ほど一撃で、スケリトルドラゴンは消し炭となった。

それでもなお、もう二匹出したのは時間稼ぎと魔力切れを目論んでいたからだ。

だが、彼女はそんな淡い希望を消し去る行動に出た。

クロ「二匹ですか、美味しそうですがめんどくさいですね、一気に方を着けましょうか…」

クロはそう言うと、腰に差していた黒い刀を握り…

クロ「武技《黒刀神閃》」

抜刀し、一撃のもと切り捨てた。

彼女にとってスケリトルドラゴンは前菜にはならなかった。

カジット「なに!？」

ペロロン「へえ」

ウルベル「ほう」

ユグドラシルにおいて戦士職と魔法職の両立は難しい。

両方を極めるのはレベルの関係で不可能に等しいから、両方とも中途半端になってしまうのだ。

無論出来なくはないが、本職はスキルで補えるものを自身の技量や

武器の性能で補わなくてはならず、本職に劣ってしまう。

つまり余程リアルスキルや武器の性能に自信がないと、採れない選択なのだ。

まあ、ウルベル達はその例外を知っている訳だが…

ウルベル（黒稲妻を使えるということは、魔法に関してはナーベラル以上の力量が有るのか）

ペロロン（スケリトルドラゴンをワンパンね…黒稲妻に、未だ未知の《武技》…王国守護者は予想以上の力量を持っている、王国と戦うのは得策とは言えないね）

ウルベルト達はそう思い警戒を強め、敵対をなるべく避ける事にした。

クロ「さて、では邪魔な骨ドラゴンも消えたことですし、そろそろあなたも消えますか？”ズーラーノーンのカジット”」

カジット「そこまで知っていたのか…」

クロ「当然です、王国に害をもたらすかもしれない奴らは把握してますから。では…」

彼女がそう言った直後…

クロ「これは没収しますね」

カジットから死の宝珠を取り上げた。

直後、死の宝珠は“インテリジェントアイテム”の名に恥じない事を見せつけるかのように黒く輝き、クロを“支配”しようとしたのだが…

クロ「私を支配出来るのはあのお方だけ」

クロの怒りを買い、呆気なく破壊された。

そして…

クロ「さようなら、あなたの敗因は王国で、計画を実行しようとしたことです。《黒稲妻》」

カジット「わしの長年の計画が…宿願が…」

カジットは己は敗因を理解して死亡した。

そしてクロは本題に、来た目的を話す。

クロ「さて、邪魔なハゲを消し炭にした所であなた達の事を聞きま

「しよるか？」

クロが最初から興味があつたのはウルベル達だつた。彼女にとつてはカジットが前菜だつたのだ。

「「そうだな」

それは彼等もだつた。

「—————」

「ガーン！」

クレマン「んふふ…あたし疲れてきちやつたな」

モモンの攻撃を軽々とかわして、クレマンティーナはそう言った。

モモン「だつたら攻撃したらどうだ？先ほどから回避の一手じやないか」

クレマン「つく、それができればねえ…」

クレマンティーナには攻撃に移りたくても出来ない理由があつた。

それは目の前に居る漆黒の鎧に身を包んだ”素人”ではなく、その先に居る白の騎士を警戒してのことだつた。

確かに黒い方の身体能力は凄まじい、だがそれだけ。

クレマンティーナからすれば子供が力任せに棒切れを振り回しているかのように感じるのだ。

奴は戦士ではない。

故に《武技》を起動し、攻撃をブレイクすれば、簡単に仕止められる。

だが白の方はどうだ、奴からは戦士として強者のオーラしか感じない。

恐らく自分とほぼ互角か…

黒の方を下手に相手してもし殺し切れなかつたら…

そんな油断ならない相手がやって来て1対2となつたら…

もしかしたら負けるかもしれない。

故に踏み込めない。

しかしそんな弱い自分を押し殺し…

クレマン（あたしとまともにやりあえる奴なんて少ない！ましてやフルプレート！絶好のカモのはずだ！）

と己を鼓舞し：

クレマン（あたしは勝てる！先に漆黒の方を確実に瞬殺し、その上で純白の騎士を殺す！）

と決めたのだった。

だが：

クレマンティーンには仕方がないとも言える大誤算があった。

一つ目は

”漆黒の方は、確かに戦士としては素人だが本職として挑めば彼女を瞬殺出来ること”

そう漆黒の方、つまりモモンガの本職は魔法詠唱者、しかも”かつて帝国にいたという『トライアダッド』という魔法詠唱者”よりも強いのだ。

二つ目は

”純白の方は手出しするつもりはなく、どちらかと言うと監督としてこの場に居ること”

たっちが居るのはモモンガからかねてより”戦士としての戦い方を教えて欲しい”というお願いを叶えたかったから。

つまり、余程の事が無い限り手出しはしないつもりだったのだ。

三つ目は

”純白の方は装備の都合上弱くみえるだけで、実は圧倒的な強者であること”

たっちがガチ装備やサブ装備をしていれば流石に気が付いただろうが、彼らは相当加減した装備を身に付けていたのだ。

四つ目は

”彼らは人間ではない為、人間の人体急所の突いても効果はあまり無いこと”

たっちの種族は昆虫系、モモンガに至っては骸骨。

五つ目は

”そもそも彼らは彼女で言う所の神人であり、レベル差とか耐性とかで彼女の攻撃はまったく効果が無いこと”

神人の中でも上位の部類だと聞けば震え上がっただろう。

など数えたらきりがなく、プレイヤー側からこの状況を聞けば、むしろ戦意喪失せずよく立ち向かった方だと思われるだろう。

おまけに、例え彼女が切り抜けたとしても、その先には王国守護者のクロが居る。

「要するに所詮無理ゲーだったのだ。」

クレマン「んふふ…いっくよー」

モモン「さあ！死力を尽くしてかかってこい！」

クレマン「なめんじゃねえ素人が！《疾風走破》《超回避》《能力向上》《能力超向上》！」

クレマンテイーヌはモモンガにとって前菜にはなり得た。

何故なら彼らにとって未知の物だった《武技》を再確認出来た上、戦士としてバランスよく戦う事の大切さが分かったからだ。

モモンガ（この戦いは色々勉強になったな…）

彼はそう思いながら、自分の腕の中で死の舞踊をしている猫をを潰した…